



CASA 連続市民講座  
**第18期 地球環境大学  
 生物多様性について学ぼう！**



**第2回講座「生き物たちが教えてくれる地球の今  
 - 地球の多様性、温暖化と野生生物 -」**

とき：2010年6月19日(土) 13:30 ~ 16:30

場所：エル・おおさか南館 734 号室

第2回の地球環境大学として、天王寺動物園の前園長（現近畿大学先端技術総合研究所）の宮下実さんと世界自然保護基金（WWF）の岡安直比さんを招き、温暖化と野生生物に見る地球の多様性について講演を行っていただきました。お二人とも普段の生活において動物と接することが多く、講演でもホッキョクグマやゴリラなどを例にあげられました。その生態と地球温暖化の現状について、経験豊富なお話を伺うことができました。

**「ホッキョクグマをとおして地球環境を  
 考える」**

宮下実さん

地球には非常にたくさんの生物が生態系をうまく維持しながら、生活を行っているが、現在そこには異変が起こっている。

まずその例として最近話題になっている、「ミツバチの失踪問題」がとりあげられた。ミツバチは農作物の授粉には欠かせない昆虫として有名である。ミツバチの減少は、農家にとっては死活問題となる。減少の理由は環境変化や残留農薬の影響によってミツバチの生態が変化したためではないとも言われているが、はっきりとはわかっていない。私たちが感じる生物の変化は、ミツバチのようにヒトの生活に直結するものが多いというのが現状である。

地球温暖化の影響を受ける動物としてホッキョクグマがあげられる。北極圏の気温は20世紀の100年間で2℃上昇したと言われているが、この2℃は-1℃と1℃の間での上昇で、氷の融解の温度をまたいでおり非常に大きな意味を持つ。氷が張る期間が短くなることで、ホッキョクグマは主食となるアザラシの捕獲が難しくなったり、移動範囲が限定されたりしている。



現在北極圏には2万頭のホッキョクグマが生息していると言われているが、このままの状態では温暖化が進行した場合、数十年後には絶滅するのではないかと危惧されている。そういった中で、ホッキョクグマの保護は非常に大きな意味をもつ。このような現状を危惧し、天王寺動物園では、積極的にホッキョクグマの繁殖や飼育をおこなってきた。

今年の2010年は国際生物多様性年である。10月にはCOP10が開催され、一部の人の間では環境問題に対する意識が非常に高くなってきているが、全体としてはまだまだ浸透していないのが現状である。我々生物は地球誕生以来、5度

絶滅の危機に瀕してきたが、今まさに6度目の危機に直面していることに気づいていない。私たちは今後生物や自然環境も含めた環境に対する意識を深めていかなければならない。

### 「携帯電話とゴリラ-知らずに脅かしてまう生物多様性とは？」 岡安直比さん

岡安さんは初め、日本の屋久島でニホンザルの行動調査を行っていたが、コンゴ共和国へ移り、1992～97年の間、「コンゴ・ゴリラ保護プロジェクト」に加わった。ゴリラはアフリカの赤道付近のジャングルにしか生育していない動物である。ゴリラは寿命が長く、また多くの食物を利用し生活を営んでいる。このことからゴリラが生きていける森は豊かな森であり、ジャングルという生態系を推し量る際の象徴種(Flagship Species)にもなっている。

しかし現在ゴリラは密猟などが原因で絶滅の危機に瀕している。そのため現在も孤児となった赤ん坊ゴリラが保護されることが多い。保護プロジェクトは、①密猟者から赤ん坊ゴリラを取り返すこと。②取り戻した赤ん坊ゴリラを保護しさらに野生に戻れるよう助けること。③野生に戻したゴリラの自然保護区を整備運営していくことである。この3つを軸にして活動が行われる中で、岡安さんは、現地の人々にゴリラを保護することが、将来は私たち自身を守ることにつながるということを理解してもらおうのが大変だったという。また国や地域によって、自然に対する考え方の違いに驚いたという。先進国の中でも日本は自然が豊かであり身近にあることから、日本人は自然の脅威だけでなくその素晴らしさも知っている。しかし欧米人にとって自然はすでに破壊し尽くされたものであり、自然に対する意識が希薄になってしまっている。自然保護活動を行うにあたり、このような欧米人に保護の目的を理解してもらうことが大変だったという。近年は新たな問題として、人

による生息地の破壊が問題となってきている。例えば携帯電話はもはや1人1台の時代になっており、バッテリーに使われている金属はゴリラが生息しているジャングルから採掘されている。このように私たちが生活の利便性を求めれば求めるほど、生態系は絶えず破壊されていく。



### 講座に参加して

現在の動物絶滅の原因は外来種によるものが39%、生息地の破壊が36%、狩猟が23%であるが、現在はそれに加えて、地球温暖化問題が台頭してきています。温暖化の影響で、天候が変化し、集中豪雨や砂漠化、さらには海氷の融解やジャングルの生態系破壊など、生物の多様性を低下させるようなさまざまな問題が発生しています。その温暖化の要因の多くは人間の消費活動です。現在人間の消費活動は地球全体のバイオキャパシティを超えて、約地球1.3個分だと言われています。消費活動の増加はCO<sub>2</sub>排出量の増加による温暖化も招いています。今回の講演はそういった現状を理解する上で非常に参考になり、また環境に対する意識改革を促すいい機会になりました。人間も地球に生息する生物の1つにすぎないということを再認識することができました。

(報告：真砂裕紀、CASAインターン)